2022 年 3 月 10 日

政策研究レポート

学校での「高校魅力化評価システム」活用事例レポート

～エビデンスと対話による施策・プロジェクトの振り返り（EDPM）に向けて～

公共経営・地域政策部 [東京] 副主任研究員 喜多下 悠貴
公共経営・地域政策部 [東京] 上席主任研究員 阿部 剛志
公共経営・地域政策部 [東京] 研究員 永野 恵

【要　旨】

■2019 年より公開した高校の組織診断ツール「高校魅力化評価システム」導入校は 186 校、40 都道府県に

○ 当社は一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームと協働し、魅力ある高校づくり（高校魅力化）が、その高校に通う生徒に与える非認知的な資質・能力等に係る効果を可視化するためのアンケート調査「高校魅力化評価システム」を 2019 年に公開した。そこから約 3 年が経過し、2021 年度に導入校数は 186 校に増加、高校所在都道府県のカバー状況を見ると、40 都道府県の高校に導入されるまでとなった。

■高校魅力化評価システムを用いた「現場での振り返り」の鍵は「対話とエビデンスの往復」

○ 本稿では高校魅力化評価システムの「現場実践の振り返り」機能にフォーカスし、都道府県教育委員会や高校において評価結果がどのように活かされているか、実際の取り組み事例を紹介する。

○ 紹介事例をまとめて表現するのであれば、それは「エビデンスと対話による施策・プロジェクトの振り返り（EDPM：Evidence & Dialogue-based Policy Management）」の実例と言える。

○ 当社が行う、評価結果を活用した高校向けの集合研修プログラムは、大別して「①羅針盤を持つ」「②気づく」「③心当たりを探す」「④次の一手を考える」という 4 つの段階により構成されている。それぞれの段階において、対話とエビデンスの活用を往復させながら、評価結果の解釈を深めていくものとなっている。

■学校経営の PDCA サイクル構築、探究学習プロジェクトの振り返り等、様々な場面にエビデンスを提供

○ 島根県教育庁では、2019 年から全県立高校で高校魅力化評価システムを導入し、2019 年 2 月に策定した「県立高校魅力化ビジョン」に基づく施策の評価の一部に結果を活用している。学校調査票と各校の結果をかけ合わせて分析することで、各施策が学習機会・学習環境の改善や生徒の成長につながっているかを検証している。また、知事部局との部局横断プロジェクトの企画立案や予算の協議においても、こうした評価結果を共有することで、データに基づいて施策を検討することができている。

○ また、県立高校における「グランドデザイン」の策定プロセスにおいて、教職員による生徒の現状把握、「育てたい生徒像」や教育活動の検討に評価が活用されている。「グランドデザイン」策定後は、各高校が「グランドデザイン」に基づく成果指標を設定し、毎年度取り組みを検証することで、PDCA を回して、教育活動のさらなる推進を図ろうとしている。こうした取り組みの具体例として、島根県立江津工業高校の例を取り上げている。

○ 山形県立小国高等学校は、2019 年度から 2021 年度にかけて取り組んできた「白い森未来探究学」の開発・実践に高校魅力化評価システムを活用した。同校では、育てたい生徒の力「オグパワ7」に対応する評価項目を中心に振り返りの校内研修を実施した。自らの取り組みに照らして評価結果を解釈し、現場で起きていたことを想起する中で「問題」を自ら特定し、今後の取り組みに向けた改善点が抽出された。

ご利用に際してのご留意事項を最後に記載していますので、ご参照ください。
（お問い合わせ）コーポレート・コミュニケーション室　E-mail：info@murc.jp

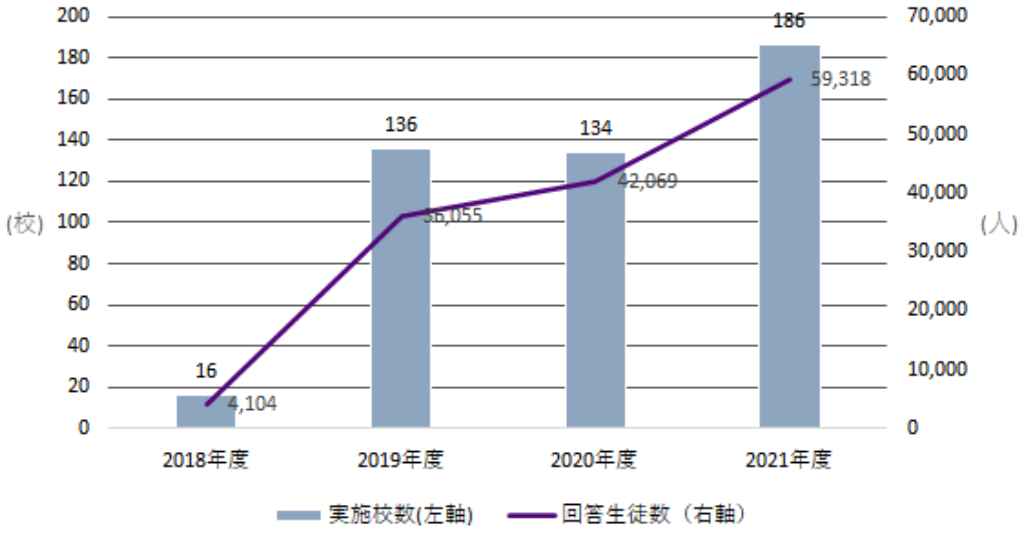
1. はじめに

筆者らは一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム（以下、「プラットフォーム」）と協働し、地域と高校との連携による、魅力ある高校づくり（高校魅力化）が、そこで学ぶ生徒に与える効果を定量的に可視化するための仕組みづくり及び検証作業を進めてきた。

2019 年 11 月に公開したレポート「『魅力ある高校づくり（高校魅力化）』をいかに評価するか[1]」 では、高校魅力化が、その高校に通う生徒に与える非認知的な資質・能力等に係る効果を可視化するためのアンケート調査の仕組みである「高校魅力化評価システム」を開発した経緯、及びその内容等について紹介を行った。

本評価システムを本格的に全国の高校に公開し、運用を開始したのもレポートと同年の 2019 年 4 月であった。そこから丸 3 年が経過し、2019 年に当時 1 年生でアンケートに回答した高校生が卒業を迎える時期となった。2019 年度に 136 校であった導入校数は、2021 年度には 186 校に増加し、高校所在都道府県のカバー状況を見ると、40 都道府県の高校に導入されるまでとなった。この間、継続して県立高校に本評価システムを導入していただいた島根県におけるパネルデータの分析結果は別のレポート「高校生の資質・能力を高める『学びの土壌』―島根県「高校魅力化評価システム」データ分析レポート―」[2]にて公開を行っている。

図表 1 高校魅力化評価システム導入校数等の推移



出所）当社作成
注釈 1）2018 年は試行調査の位置づけ。
注釈 2）回答生徒数は、実際に回答データとして集められた生徒数の数。回答 ID を付与したが未回答の生徒は含まれない。

上述のレポートでは、高校魅力化評価システムの機能のうち、マクロデータによる教育施策の効果検証という機能を紹介しているが、本稿で紹介するのは、高校魅力化評価システムのもう一つの機能である「現場実践の振り返りへの活用」である。この点に関して、もう一度過去のレポートから引用したい。「『高校魅力化評価システム』は、魅力ある高校づくりによる、生徒の資質・能力、意識等の変化を「見える化」することを目的としたアンケート調査である。加えて、高校魅力化に取り組む各高校、地域、換言すれば高校に関わる教員、地域の大人が、自らの実践を振り返るための、現状の取り組みを『見える化』するためのツールでもあることが特徴となっている」。

[1] https://www.murc.jp/report/rc/policy_rearch/politics/seiken_191122_3/
[2] https://www.murc.jp/report/rc/policy_rearch/politics/seiken_220310_2/

本稿では本評価システムのこうした「現場実践の振り返り」機能にフォーカスし、都道府県教育委員会や高校といった教育現場において、本評価システムの結果がどのように活かされているか、どのような振り返りが行われているかという点に着目し、実際の取り組み事例を紹介していきたい。

2. EBPM から EDPM へ

事例紹介に先立って、これから見ていく取り組みをまとめて表現するのであれば、それは「エビデンスと対話による施策・プロジェクトの振り返り（EDPM：Evidence & Dialogue-based Policy Management）」の実践例である。これは「証拠に基づく政策立案（EBPM ：Evidence Based Policy Making）」を下敷きとして名付けたものである（以降の考え方は、中原淳（2020）『「データと対話」で職場を変える技術　サーベイ・フィードバック入門―これからの組織開発の教科書―』を参考にしている）。

ところで、評価システムを利用した高校に調査結果を返却すると、稀にこういうコメントをいただくことがある。

「結局、この結果の『答え』は何ですか？うちの高校は何をすればいいですか？」

こうした疑問に対して、「はい、では来年度は▲▲という取り組みを行ってください」という「解」を提供できることを”EBPM”と呼ぶのであれば、本評価システムはそのような性質のものではない。その理由は様々あるが、1 つは高校ごとに「育成を目指すべき生徒像」や「目指すべき高校の姿」が異なること。そしてもう 1 つは、そのために過去取り組んできたこと、そしてこれから取り組めることにも違い（経路依存性）があること。加えて、取り組みを担う教職員や地域の大人の信念や動機づけ、納得感もまた様々であること、等である。こうした各校、地域ごとの多様性を捨象した上で、アンケート調査の結果のみで一方的な「指導・助言」を行っても、現場で「次の一歩」を踏み出す力にはなりにくいと考えている。

我々が本評価システムを通じて提供したいのは、そうした「与えられる解」ではなく、現場で奮闘する方々が自ら対話を深め、納得のいく解に至るための「問い」である。後述の事例から、こうした考え方を振り返りにどう活かしているか読み取っていただきたい。

本評価システムは、高校や高校生を取りまく教育環境の凸凹（強み・伸びしろ）を示す「地図・地形図」のようなものである。その凸凹から、目標地点に向かってどのようなルートを描き、選択することができるか。より内容に即して言えば、生徒を取り巻く教育環境の強みや伸びしろ、生徒の非認知的な資質・能力等の育ちの凸凹（強み・伸びしろ）に関するデータを前に、それらの情報を繋ぎ合わせて「次の一手」を構想するかは、高校に関わる教職員や地域の人々次第なのである（もちろん読み取りの際には、筆者らも主に「問い」を投げかける形で伴走させていただく）。

3. 「高校魅力化評価システム」を用いた振り返りの手法と考え方

(1) 「高校魅力化評価システム」が見える化する項目

事例紹介に入る前に、簡潔に高校魅力化評価システムの質問構成要素を説明する。図表 2 にある通り、本評価システムでは、表側の①～⑤までの 5 つの実態・意識を、表頭の 4 つの観点（主体性、協働性、探究性、社会性）に関わるものごとに整理して質問を構成している。

図表 2 高校魅力化評価システムの質問構成要素

	生徒向け調査の構造	主体性	協働性	探究性	社会性
インプット指標	①学習活動	・主体性に関わる学習活動の量	・協働性に関わる学習活動の量	・探究性に関わる学習活動の量	・社会性に関わる学習活動の量
	②学習環境	・主体性に関わる学習環境の質（挑戦の連鎖を生む安心・安全の土壌）	・協働性に関わる学習環境の質（協働を生む多様性の土壌）	・探究性に関わる学習環境の質（問う・問われる対話の土壌）	・社会性に関わる学習環境の質（地域や社会に開かれた土壌）
アウトプット指標	③能力認識	・主体性に関わる生徒の自己認識	・協働性に関わる生徒の自己認識	・探究性に関わる生徒の自己認識	・社会性に関わる生徒の自己認識
	④行動実績	・主体性に関わる生徒のここ1カ月の行動	・協働性に関わる生徒のここ1カ月の行動	・探究性に関わる生徒のここ1カ月の行動	・社会性に関わる生徒のここ1カ月の行動
	⑤満足度	高校、自身の生活等に関わる総合的な評価			

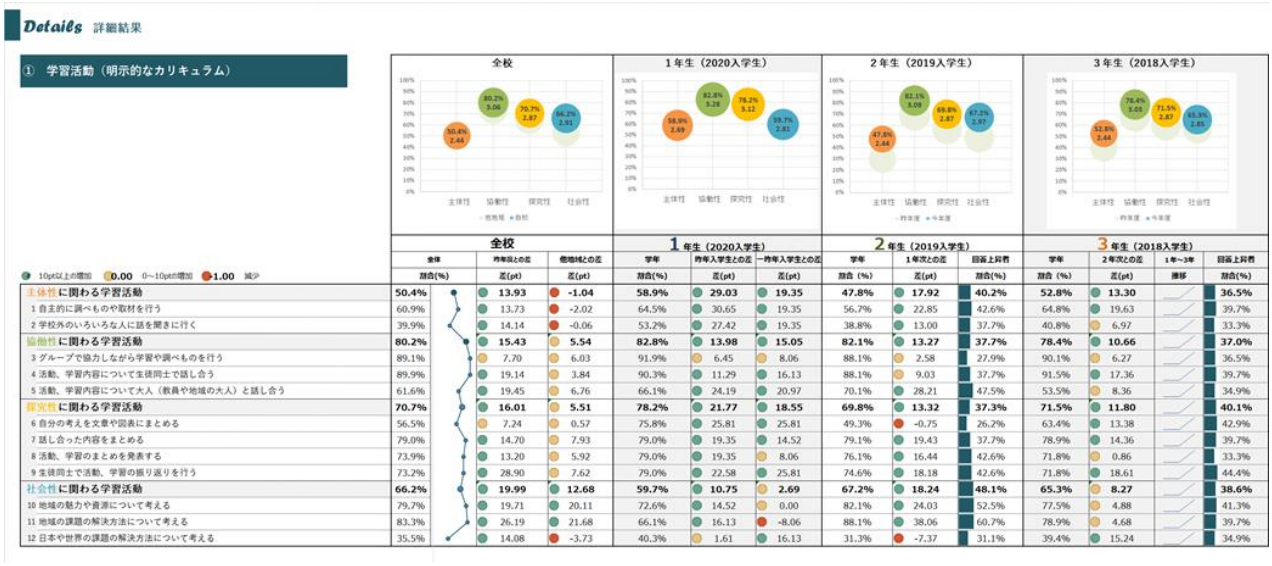
出所）当社作成

ここで、学校でよく行われる評価と比べた際に本システムの特徴となるのが、①②のインプットに関わる指標と、③～⑤のアウトプットに関わる指標の両方を盛り込んでいることである。これにより、本評価システムは、「アウトプット指標の変化（伸び）が見られたとき、それと関連するインプット指標は何か」といった、取り組みとその成果の繋がりについて考察することが可能となっている。

(2) 評価結果の返却

高校魅力化評価システム受検校には、調査終了後、以下図表で示すような形で結果を集計、視覚化した「高校魅力化ポートフォリオ」を返却している。図表上の「総括表」では、主に上述の 5×4 の要素の現状と前回調査からの伸び等を視覚的に概観できる。図表下の詳細結果では、個別の質問ごとの回答結果を、学年別、比較対象地域との比較、時系列比較等様々な切り口から集計、分析し一覧表示している。

図表 3 「高校魅力化ポートフォリオ」(調査結果のフィードバック)のイメージ



出所）当社作成

(3) EDPM の考えに基づいた集合研修プログラムの概要

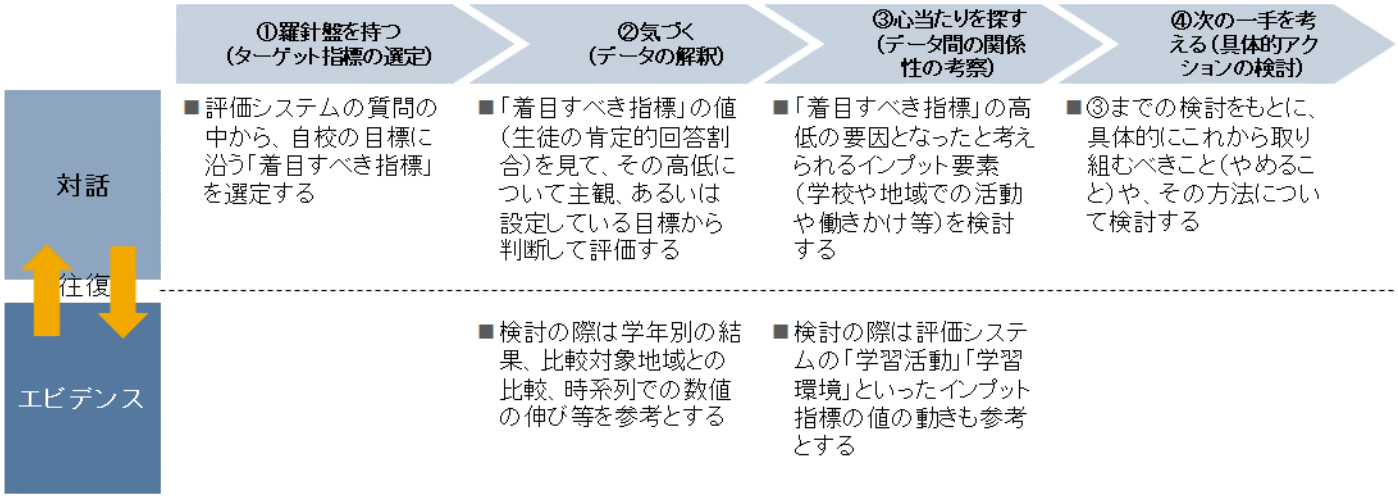
① 集合研修プログラムの概要

(2)で見た結果の返却と合わせて、各校向けに、調査結果を読み取るための研修資料及び研修プログラムの提供を行っている。この研修プログラムにおいて、我々は冒頭に述べた「エビデンスと対話による施策・プロジェクトの振り返り(EDPM:Evidence & Dialogue-based Policy Management)」の実現を目指している。ここではその概要について簡単に説明したい。

我々が行っている研修プログラムは現在、教育委員会単位等の申し込みに対し、複数の参加校に出席いただく集合研修の形式で提供を行っている。集合研修の目的は、主に「高校魅力化評価システムのねらいや読み取り方法を理解し、自校の結果について、自校の教職員や関係者に伝えられるようになる」こと、「自校の結果を振り返り、分析し、教職員全体で次の一手を考える手法を学ぶ」ことと設定している。

この集合研修は、基本的な数値の読み取り方等の解説を除き、大別して 4 つの段階により構成している。それぞれの段階において、研修参加者間の対話とエビデンスの活用を往復させながら、結果の解釈を深めていく構造になっている。

図表 4 EDPM の考えに基づく研修のイメージ



出所)当社作成

② 段階 1:羅針盤を持つ(ターゲット指標の選定)

はじめに、振り返りを行う個人や高校といった単位で、「着目すべき指標」を設定する。本評価システムは総質問数が 70 問超とまさに「情報の海」であり、全ての指標を網羅的に見ようとすると溺れてしまうという比喩から、着目すべき指標のことを「羅針盤」と表現している。

羅針盤は各校、または個人によって様々である。校訓、スクール・ミッション、スクール・ポリシー等の言語化された目標・役割に近い質問項目を設定する場合や、そうした組織的目標からブレイクダウンする形で、個々の教職員や地域の大人が持っている目標、願い、心構え等から設定する場合もある。アンケート指標を補助線として、こうした組織や個人の目標について研修参加者間で対話を行い、改めて各校の目指す「成果」を意識下にのぼらせていく。

③ 段階 2:気づく(データの解釈)

次に、着目すべきいくつかのアンケート指標について、実際にその回答結果を見ていく。本評価システムは、基本的に「～をしている」「～がある」「～ができる」といった質問に対する肯定的回答割合(「あてはまる」+「どちらかといえばあてはまる」の回答者割合)を集計、表示している。着目した指標の回答結果について、その高低に関する解釈を行い、関係者

間で対話を行う。

「回答結果の高低に関する解釈」に関して、事前に学校として特定の目標値を定めている場合も考えられる(例:生徒の自己肯定感の肯定的回答割合を 70%以上とする、など)が、「思ったよりも高い(低い)」「期待していた水準よりも高い(低い)」といった、読取者の主観的な評価も重要であると考えている。関連して、我々が事前に「○%以上は高い(%未満は低い)」といった外在的な線引きを設けることもしていない。各校ごとに目標は様々であること、また全ての質問において「高ければ高いほどいい」かどうかは議論の余地があること等理由はさまざまあるが、一番の理由は、「思ったよりも」「期待したよりも」といった感覚と数値とのギャップにこそ、次のステップ以降の、具体的かつ現実的な取り組みの改善を検討するための手掛かりがあると考えるからである。

④ 段階 3:心当たりを探す(データ間の関係性の考察)

アンケートで得られた数値が「思ったよりも」「期待したよりも」高い(低い)とした時、その要因について、主に同じ学校内の参加者間で対話を通した検討を行うのがこのステップである。「2 年生の生活満足度が高いのは、今年度、個人面談の時間に力を入れたからではないか?」「本校生徒は地域でのアルバイトを積極的に行っているので協働性に関する指標は高いと思っていたのだが、思ったよりも低かった」などは、実際に心当たりを探す対話の中で得られた言葉である。こうした対話を通して、次のステップで考える具体的な取り組みの仮説をいくつも構築していく。

こうした対話、検討を補助するものとして、本評価システムの「学習活動」「学習環境」といったインプット指標の値及びその変化に着目することも有効である。先ほどの前者の例(「2 年生の生活満足度が高いのは、今年度、個人面談の時間に力を入れたからではないか?」)でいえば、学習環境にあたる「将来のことや実現したいことを話し合える大人がいる」という質問の肯定的回答割合が、昨年度と比べて約 9pt 上昇していたことや、学習活動にあたる「自分の考えを文章や図表にまとめる」が同じく約 16pt 上昇していたことが、「個人面談を通した大人との深い対話と、生徒のアウトプットがカギ」ではないか、という仮説を補強する役割を果たした。

⑤ 段階 4:次の一手を考える(具体的アクションの検討)

ここまでで得られた仮説をもとに、関係者が納得感を持って、具体的に、かつすぐにでも着手できる取り組みを設定するのがこの「次の一手を考える」ステップである。これは、必ずしも新しい取り組みを足す、ということばかりではない。新たな活動を加えたり他学年にも展開するといった「足す(+)」一手に加えて、活動を見直す・減らす、効率化するといった「引く(−)」一手、活動やグループを組み合わせ、連携させる「かける(×)」一手、活動の単位を細かくする、個別化するといった「割る(÷)」 一手など様々なアイデアが考えられるだろう。

以上のステップすべてを通して重要なのは、アンケート結果というエビデンスを活用しながらも読み取りを行った参加者同士の対話を通して次の一手の策定に迫っていくというアプローチである。こうしたエビデンスと対話の往復を通して、納得感や「自分事」感のある「次の一手」を手にしていただくことこそが、学校の PDCA サイクルの実質化にとって重要であると考えている。

4. 事例紹介

ここからは具体的な事例を通して、高校魅力化評価システムを活用した振り返りの実践例を紹介していきたい。

実践例は、どのレベルでの振り返りを行うかという点でいくつかのパターンに分けられる。はじめに、前述した集合研修プログラムでの対話を通した「次の一手」の振り返り事例として、熊本県で行った集合研修について紹介する。次に、学校経営等における PDCA サイクルの構築に本評価システムを活用しようとしている事例として、島根県教育庁、及び島根県立江津工業高等学校の事例を紹介する。最後に、高校と地域が協働した探究学習活動の振り返りに本評価システムを活用いただいた、山形県立小国高等学校の取り組み例を紹介したい。

(1) 集合研修プログラムにおける振り返りの例(熊本県教育委員会)

熊本県では 2019 年度より、県が指定する高校あるいは希望する高校に対して、高校魅力化評価システムを導入している。2021 年度は 7 校が調査を利用し、結果返却後にオンラインで集合研修を行った。各校からは平均して 2~3 名程度が参加し、上述した研修のステップに即して、結果の読み取りや対話を行っていただいた。ここでは、実際に対話を踏まえて各校でどのような読み取り、解釈が生まれてきたか抜粋して紹介したい。

図表 5 各校の振り返り結果の例

高校	①羅針盤を持つ	②気づく	③心当たりを探す	④次の一手を考える
A 高校	主体性に着目	1 年生、2 年生の数値が低い。特に自信がなくて、行動量が少ないようである。3 年生になると、6 割くらいが肯定的回答に転じる。	以前生徒と振り返りを行ったところ、コロナ禍で活動に制限があることに対する意見が寄せられた。	今後、地域協働活動も増やしていきたい。3 年生と 1、2 年生を関わらせ、一緒に地域に出るプログラムも面白いかもしれない。
B 高校	協働性に着目	「共同作業だと自分の力が発揮できる」が 3 年生で大きく上昇する。 一方で、1 年生の「学校外のいろいろな人に話を聞きに行く」が低い。	3 年生は、探究学習の中で共同作業があり、その経験を通して自信がついたのではないか。関連して、探究性に関わる自己認識の「情報を関連付ける力」も大きく上昇している。地域、友達と協働しながら学ぶ環境が整ってきていると思われる。	3 年生だけでなく、1 年生でも自分たちで学校外に飛び出す活動の充実の必要性を感じた。自分たちも飛び出していけるというイメージを持ってもらえる方法を考えたい。
C 高校	表現力に着目	「人前で発表することは得意」が約 5 割で意外と低い。小さな地域で慣れ親しんだ人たちに発表する機会があるので、もっと高いと思っていた。	生徒に板書をさせた授業後のアンケートで、間違えることに対する不安が大きいとの声があった。こうした生徒の意識が再認識された。	中高一貫校であるため、もし中学校段階でも間違えることに対する不安が大きい場合は、連携して対応していきたい。

出所)研修での各校の発言内容をもとに当社作成

A 高校では、主体性に関する指標の学年差に着目したことを通じて、コロナ禍で活動が制約される中ではあるものの、異学年の交流を通してそれを補い、1, 2 年生の自己肯定感や積極的な行動を促したいとのことであった。B 高校でも同様に、3 年生が地域との協働による探究学習の中で見せた成長をアンケート指標の伸びから確認し、他学年にもその要素を展開することを志向する振り返りとなった。

C 高校では、生徒が対外的に発表する機会を設けていたものの、発表に対する得意意識が思ったよりも低いことに着目。中学校との連携を通して、「間違うことに対する不安」といった意識への対応に焦点を当てた。

(2) 学校経営等における PDCA サイクルの構築例

① 教育委員会による施策検証及び個別高校の伴走支援における活用例（島根県教育庁）

島根県教育庁においては、2019 年から全県立高校で「高校魅力化評価システム」を導入しており、2019 年 2 月に策定した「県立高校魅力化ビジョン[3]」に基づく施策の評価の一部に「高校魅力化評価システム」の結果を活用している。学校調査票と各校の結果をかけ合わせて分析することで、各施策が学習機会・学習環境の改善や生徒の成長につながっているかを検証することができるのである。また、知事部局との部局横断プロジェクトの企画立案や予算の協議においても、こうした評価結果を共有することで、データに基づいて施策を検討することができている。

こうした県の施策の評価としての活用に加え、「現場実践の振り返り」機能も大いに活用されている。「県立高校魅力化ビジョン」では、「全ての高校において、地域と協働しながら『目指す学校像』、『育てたい生徒像』、『特色ある教育課程』及び『求める生徒像』等の明確化を図る。」ことを掲げ、2021 年 6 月に、全県立高校が「グランドデザイン[4]」を策定した。「グランドデザイン」の策定により、新学習指導要領に示されたカリキュラム・マネジメントの考えのもと、各校が、「育てたい生徒像」などのスクール・ポリシーに基づいて目指す方向や特色を明確にし、教育活動を体系化するとともに、それを教職員・生徒・保護者を含めた地域社会と共有することを目指している。

この「グランドデザイン」の策定プロセスにおいて、「高校魅力化ポートフォリオ」を活用する動きが見られた。各校が定めている校訓や学校教育目標等に対して生徒の現状はどうなのかを、「高校魅力化ポートフォリオ」をもとに教職員で把握し、「育てたい生徒像」を具体化したり、それを実現するための教育活動を検討していったのである。「育てたい生徒像」が抽象的な状況では具体的な教育活動につなげにくいこともあるが、「高校魅力化ポートフォリオ」では、資質・能力が具体化されていることで、現状と照らし合わせやすく、また学習活動や学習環境に対する生徒の評価も把握できるため、どのような学習機会が不足しているかを検討しやすいのではないかと考える。

「グランドデザイン」策定後は、各高校が「グランドデザイン」に基づく成果指標を設定して、毎年度取り組みを検証することで、PDCA を回して、教育活動のさらなる推進を図ろうとしている。この成果指標の一部にも、「高校魅力化評価システム」の項目が活用されている。県としては、アンケート調査を 6 月頃に実施し、「高校魅力化ポートフォリオ」を夏休み前に返却、8 月に担当者向けに結果の読み取り方の研修を実施し、各校で対話の場を設けて年度内の改善につなげることを促している。そして、10 月に県が主催する「グランドデザイン PDCA 研修」を開催し、「高校魅力化ポートフォリオ」等を活用した校内での PDCA の実践事例を全校で共有するとともに、PDCA サイクルをどう学校経営に位置付けていくかの意見交換等も行っている。このように PDCA の節目となるような機会をつくることで、各学校のグランドデザイン実現のための PDCA サイクル構築の支援を行っている。また、個別の学校へ伴走する際に、学校の状況把握に「高校魅力化ポートフォリオ」を活用している事例もあると聞いている。

さらに、各高校が成果指標として設定している項目のみ、年度末に学校評価等と合わせて再度アンケート調査を実施することで、年度内の生徒の成長を見える化している学校も複数出てきている。その具体の事例を以下に紹介する。

---

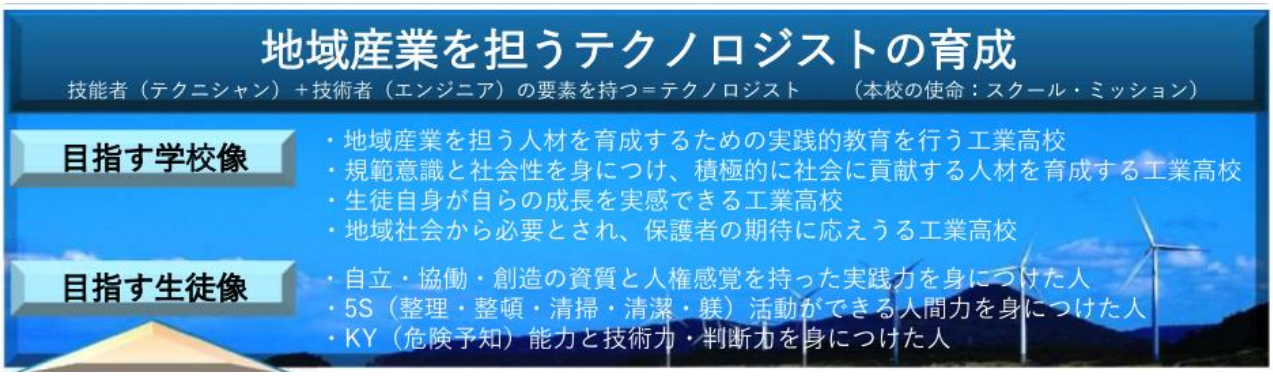
[3] https://www.pref.shimane.lg.jp/gakkokikaku/saihen/keikaku.data/miryokukavisionsaisyu.pdf
[4] https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/koukoumiryoku/guranndodezainn/r4guranndodezainn.html

② グランドデザインに沿った指標の選択と独自アンケートによる進捗管理の実例（島根県立江津工業高等学校）

島根県立江津工業高等学校（以下、「江津工業高校」）では、グランドデザイン[5]の「目指す学校像・生徒像」に関する教育活動を校内において評価・改善する成果指標の一つとして、高校魅力化評価システムの指標のうち、自校の目標に関連する 19 項目を「羅針盤」としている。上述した、県が実施する年 1 回の高校魅力化評価システムに加え、各学期の節目に独自アンケート調査を実施し、その結果を追いかけるとともに、生徒、保護者向けに公開している。

例えば、江津工業高校が「目指す生徒像」に掲げる「自立・協働・創造の資質と人権感覚を持った実践力を身につけた人」には、「立場や役割を超えて協働する機会がある」、「自分とは異なる意見や価値を尊重することができる」という指標が対応付けられている。2 つの指標の肯定的回答割合の平均値を見ると、6 月：76.2%→12 月：86.0%という伸びが見られる。

図表 6　江津工業高校グランドデザイン 2022（一部抜粋）



出所）島根県 HP に掲載された県内各校のグランドデザインより一部抜粋。（最終閲覧日 2022 年 2 月 7 日）
https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/koukoumiryoku/guranndodezainn/r4guranndodezainn.data/t_goukou.pdf

図表 7　グランドデザインの成果指標の推移

1．グランドデザイン（目指す学校像・生徒像）の成果指標

※1）太字は目指す学校像・生徒像。※2）Qは高校魅力化アンケート番号。※3）数値は肯定的に回答した生徒の割合（%）

	R3				R4				R5			
	6月	7月	12月	3月	6月	7月	12月	3月	6月	7月	12月	3月
1　地域産業を担う人材を育成するための実践的教育を行う工業高校	**35.6**		**69.1**									
Q14.地域の魅力や資源について考える	33.1		72.7									
Q15.地域の課題の解決方法について考える	32.5		75.3									
Q58.地域社会の魅力や課題について、自主的にテーマを設定し、フィールドワーク等を行いながら調べ、考える学習活動に対して、熱心に取り組んでいる	41.1		59.3									
2　規範意識と社会性を身につけ、積極的に社会に貢献する人材を育成する工業高校	**46.6**		**64.7**									
Q53.地域をよりよくするため、地域における問題に関わりたい	56.3		74.7									
Q55.将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある	62.3		76.0									
Q67.地域社会などでボランティア活動に参加した	21.1		43.3									
3　生徒自身が自らの成長を実感できる工業高校	**84.8**		**84.7**									
Q64.学校で学習することで、自分ができることやしたいことが増えている	84.8		84.7									
4　地域社会から必要とされ、保護者の期待に応えうる工業高校	**58.3**		**75.5**									
Q19.地域から大切にされている雰囲気を感じる	76.2		84.7									
Q29.地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	50.3		75.3									
Q53.地域をよりよくするため、地域における問題に関わりたい	62.3		74.7									
Q55.将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある	56.3		76.0									
Q57.住んでいる地域の文化や暮らしの価値ある部分を、自らの手で未来に伝えていきたい	49.0		74.7									
Q60.将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う	55.6		67.3									
5　自立・協働・創造の資質と人権感覚を持った実践力を身につけた人	**76.2**		**86.0**									
Q28.立場や役割を超えて協働する機会がある	61.6		74.7									
Q41.自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	90.7		97.3									
6　5S（整理・整頓・清掃・清潔・躾）活動ができる人間力を身につけた人	**65.3**		**76.4**									
Q38.目標を設定し、確実に行動することができる	64.9		76.0									
Q51.自分で計画を立てて活動することができる	65.6		76.7									
7　KY（危険予知）能力と技術力・判断力を身につけた人	**56.3**		**69.3**									
Q72.授業の内容について、「なぜそうなるのか」と疑問を持って、自分で考えたり調べたりした	69.5		67.3									
Q78.客観的な証拠に基づき考え、判断する科学的視点から課題解決にあたることができる	43.0		71.3									

出所）江津工業高校 HP 掲載資料「グランドデザインに関する教育活動の評価・改善の取組みについて（お知らせ）」より一部抜粋。（最終閲覧日 2022 年 2 月 7 日）　https://www.gotsu-th.ed.jp/files/original/20220111191105970efbbdecc.pdf

[5] 江津工業高校のグランドデザイン（2022 年度版）は次を参照（最終閲覧日 2022 年 2 月 7 日）。
https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/koukoumiryoku/guranndodezainn/r4guranndodezainn.data/t_goukou.pdf

(3) 探究学習プロジェクトの振り返り事例（山形県立小国高等学校）

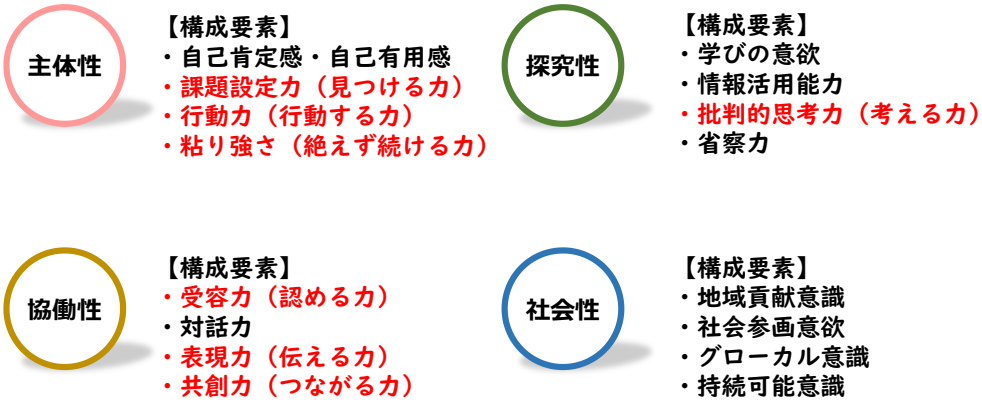
山形県立小国高等学校（以下、「小国高校」）は、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業 地域魅力化型」の指定校となり、2019 年度から 2021 年度にかけて「白い森未来探究学[6]」の開発・実践に取り組んできた。

同校では、3年間の実践の中で「白い森未来探究学」等において育てたい生徒の力として「オグパワ 7」を設定（図表 8）しており、「オグパワ 7」に対応する高校魅力化システムの評価項目（図表 9 参照、赤字がオグパワ 7 の指標と対応する項目と設定したもの。以下「オグパワ 7 評価項目」）を中心に高校魅力化評価システムを使った振り返りの校内研修を実施した。

図表 8 小国高校において育てたい生徒の力「オグパワ7」

出所）白い森人創生プロジェクトチーム「第2年次研究開発実施状況報告書」より

図表 9 オグパワ7と高校魅力化評価システムの評価項目

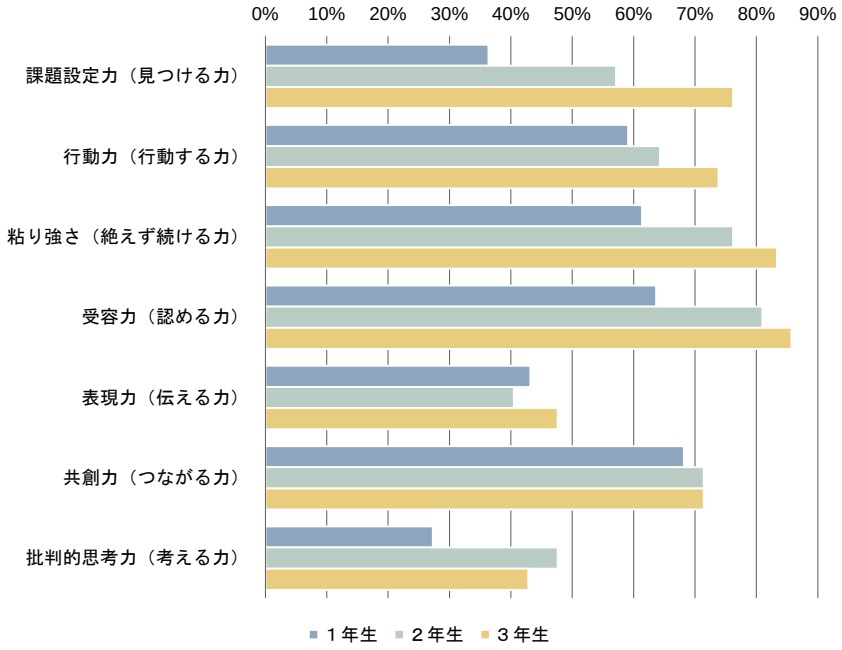


出所）当社作成

[6] https://shiroimori-ryugaku.com/

2019 年度に入学した生徒の 1～3 年生にかけてのオグパワ 7 評価項目の変化をみると、すべての項目において1年生時よりも 3 年生時において肯定的回答割合が上昇していることがわかる。特に「課題設定力（見つける力）」の伸びが顕著であった。

図表 10 オグパワ7に該当する評価指標の「肯定的回答の割合」の推移

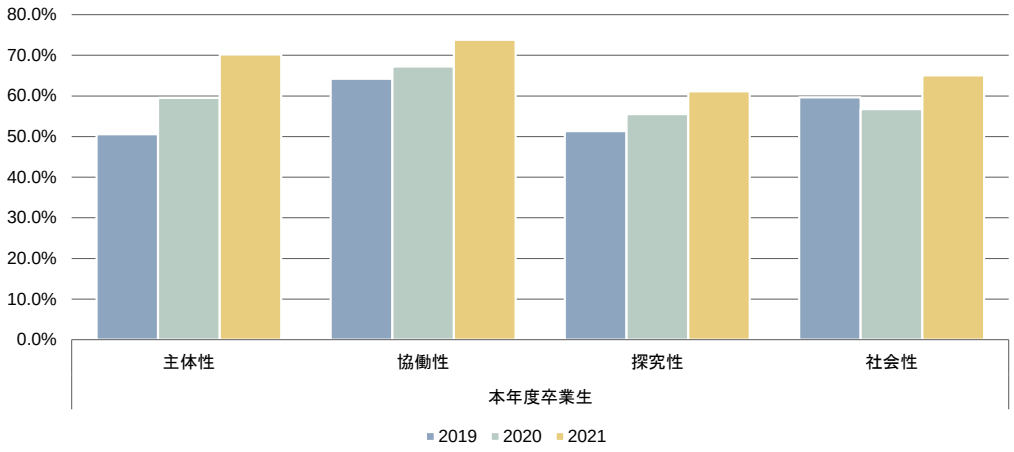


出所）当社作成

また、高校魅力化評価システムの生徒の資質・能力に関わる全項目の推移でみると、同学年の3年間の推移では前述した「課題設定力（見つける力）」などが含まれる「主体性」において特に顕著な伸びが確認できるほか、オグパワ7評価項目が多く含まれる「協働性」も堅調な伸びと高い肯定的回答割合を示している。

また、「探究性」も堅調な伸びが確認できるが、肯定的回答割合の水準は「主体性」、「協働性」に比べるとやや低位の結果であるほか、「社会性」は2年次に一度低下する傾向を示したが、1 年次に比べて 3 年次では伸びが確認できる結果であった。

図表 11 高校魅力化評価システムにおける「生徒の自己認識」の評価指標の「肯定的回答割合」の推移



出所）当社作成

この結果を踏まえた校内研修では、これまでの取り組みに対する納得や気づき、よりよい授業設計に向けた課題などが参加者から出された。以降では、その中の一例を紹介したい。

前述のとおり、オグパワ 7 評価項目は高校魅力化評価システムの「主体性」「協働性」との重なりが多く、これらの項目では伸びが顕著であったり、肯定的回答割合が高位であったことから、「白い森未来探究学」の開発・実践に取り組んできた教職員の方々からは納得と自信の声が聞かれた。

一方、オグパワ 7 の中で「批判的思考力（考える力）」では肯定的回答割合が半数に満たなかったことや、同項目が含まれる「探究性」でも「主体性」や「協働性」と比較して肯定的回答割合が低位であることにも着目された。

このことについて、研修に参加した教員からは「かつて地域文化学として探究に取り組んでいたころには、批判的思考（考える力）を重視していたが、これを強く求めると生徒自身で探究を進めることが難しくなり、教員が誘導しなければならない状態になりやすかった。そこで白い森未来探究学では主体的にマイプロジェクトを持って活動することに重点を置く PBL（Project Based Learning）に切り替えてきたので今回の結果はとても腑に落ちるものである」との声が聞かれた。

また、「『挑め、ともに！』を合言葉としている本校としてはマイプロジェクトに主体的に取り組むことを重視する良さを継続したい一方で、マイプロジェクトを進める中で学問的な探究に関心をもつ生徒もいた。これまでこうした生徒に十分に対応できていない場面があったので、個々の関心や探究の深まりに応じた伴走を改めて心がけようと思った」との意見も出された。

ともすれば評価項目で低位であること自体が「問題」とされてしまうこともあるが、小国高校では自らの取り組みに照らして評価結果を解釈し、現場で起きていたことを想起する中で「問題」を自ら特定し、今後の取り組みに向けた改善点まで抽出された。この研修で行われた一連の対話は、正に「エビデンスと対話による施策・プロジェクトの振り返り（EDPM：Evidence & Dialogue-based Policy Management）」の実践現場であった。

5. おわりに：今後の課題と展望

ここまでに見てきたように、高校魅力化評価システムは、学校経営や特定の取り組み・プロジェクトの評価など、学校運営上の様々な場面において、エビデンスと対話をベースに PDCA サイクルを円滑に回していくためのツールとして活用可能であることを紹介してきた。こうした機能は、スクール・ミッション、スクール・ポリシーの策定と、それに基づく特色ある学校経営が求められる状況、学校運営協議会等、学校内外の様々な関係者が参画し学校運営に関する実りある対話が求められる状況、社会とより密接に連携し、主体的、対話的で深い学びを開発・実践していくことが求められる状況といった、現在の高校を取り巻く数々の環境下において、より重要性を高めているものと考えている。

一方で、こうした機能をより強化していくための課題も多い。読取者にとって分かりやすい結果の表示方法や、より深い対話を促す研修プログラムの検討はもちろんのこと、昨今強調される「エビデンス・ベースド」のもとで増加する評価活動の中で、学校負担を軽減しながら調査を実施していただくための方策の検討も求められる。また、評価結果の振り返りによる実質的な効果を感じてもらうためのモデルケースづくりとその発信も継続的に行っていきたいと考えている。

また、本評価システムの重要な当事者である生徒による学校評価活動への参画も重要な論点であると考えている。高校魅力化評価システムを活用して、生徒が結果の読み取りに関わっていく事例についても、引き続き積み上げていきたいと考えている。

参考文献

中原淳（2020）『「データと対話」で職場を変える技術　サーベイ・フィードバック入門―これからの組織開発の教科書―』株式会社 PHP 研究所

― ご利用に際して ―

- 本資料は、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。
- また、本資料は、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一的な見解を示すものではありません。
- 本資料に基づくお客様の決定、行為、及びその結果について、当社は一切の責任を負いません。ご利用にあたっては、お客様ご自身でご判断くださいますようお願い申し上げます。
- 本資料は、著作物であり、著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い、引用する際は、必ず出所：三菱UFJリサーチ＆コンサルティングと明記してください。
- 本資料の全文または一部を転載・複製する際は著作権者の許諾が必要ですので、当社までご連絡ください。